

神田外語大学言語科学研究科 講演会

参加
無料

12.9 (土)
15:00-16:30
オンライン開催



同日13:30~14:30 本学大学院説明会を開催いたします。詳しくは下記ホームページをご覧ください。
神田外語大学大学院 入試説明会 <https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/main/opencampus/extension/>

テーマ

「日本語の語彙的複合動詞の分析
：構造の制約と意味の制約」

講師：松本 曜 教授

国立国語研究所・総合研究大学院大学教授

お申し込み方法

下記URLのフォームに必要事項を記入のうえ
お申込みください。
申込期間終了後にご登録のメールアドレス宛
に接続先等の詳細をご案内します。

<https://forms.gle/L7NvNVwx2bUFYXa37>



申込期限：12/5 (火)

お問い合わせ：infograd@ml.kuis.ac.jp 043-273-1320

講師プロフィール

経歴

1992年スタンフォード大学言語学科博士課程終了、Ph.D.
東京基督教大学専任講師、明治学院大学助教授、教授、神戸大学教授を経て2017年より現職。

主な書籍

著書『日本語語彙的複合動詞の意味と体系—コンストラクション形態論とフレーム意味論—』（ひつじ書房2018年）『Complex predicates in Japanese : a syntactic and semantic study of the notion 'word'』（CSLI, Kuroshio Publishers, 1996年）。
編著書『フレーム意味論の貢献：動詞とその周辺』（開拓社2022年）、『Broader perspectives on motion event descriptions』（John Benjamins 2020年）、『移動表現の類型論』（くろしお出版2017年）、『認知意味論』（大修館書店2003年）。他論文多数。

専門

意味論、及び意味論と形態論、統語論、語用論、一般的認知とのインターフェース。認知意味論の立場から、特に移動動詞、状態変化動詞、使役動詞の意味論と類型論を研究している。さらに多義性、意味関係などの語の意味論の諸課題。ほかに、聖書翻訳の意味論。

講演要旨

日本語には数千の複合動詞が存在するが、その数はある意味では非常に少ないと言える。なぜなら、日本語には2000以上の和語動詞があり、それを組み合わせると500万以上の複合動詞が可能であるはずだからである。どうして特定の組み合わせの複合動詞しか認められないのであろうか。この発表では、フレームとコンストラクションのアプローチ (Fillmore 2009) から、この問題についてどのような答が得られるかを考察する。

陳・松本 (2018) は、語彙的複合動詞における制約について、フレーム的整合性の制約 (世界知識における整合性) とコンストラクション的制約 (言語的単位の形式と意味に課せられた制約) の両方から考察している。まず、陳・松本は、語彙的複合動詞の諸特性は、複数の階層でのコンストラクション・スキーマによって捉えられるとする。そして、語彙的複合動詞で最も一般性の高いコンストラクションのレベルでは、デフォルト的な主語一致などが制約として課されているとする。また、複合動詞の意味タイプ別 (手段・目的型など) にも意味的な制約が課されているとした。さらに、その際の意味を語彙的意味フレームとして捉え、そこに百科事典的知識を含めることによって、意味的な整合性の制約を捉えることができるとした。フレーム的整合性については、どのような事象がどのような原因で起こり、どのような行為によって実現するかなどについての世界知識が参照されている。この発表では、この立場からいくつかの複合動詞を考察する。取り上げるのは、「散り残る」「割れ残る」などである。

しかしながら、このアプローチの今までの研究には問題点がある。たとえば手段・目的型の複合動詞では、どのような使役状態変化がどのような使役手段によって実現するかについての知識が参照されているとされるが、そのような知識に基づくフレーム的整合性は、複合動詞にとって必要条件ではあるが、十分条件ではない。実際のところ、大規模コーパスからどのようにして人がものを壊したり割ったりできるかを調べると、複合動詞として認められない使役手段が数多く見出される。ここでは、JaTenTen corpus (84億語) および筑波webコーパス (11億語) の二つから「Vて壊す」「Vて割る」などの用例を抽出し、それと「V壊す」「V割る」との比較を行う。それによって、両者が可能である場合にどのような意味の違いが見出されるか (「叩いて壊す」と「叩き壊す」)、また前者が可能なのに後者が不可のケースとしてどのような場合があるかを考察する (「落として壊す」「ぶつけて壊す」「触って壊す」vs「*落とし壊す」「*ぶつけ壊す」「*さわり壊す」)。その考察から、手段・目的型の複合動詞の意味には、世界において起こりうる認識されるすべての手段・目的の組み合わせではなく、より直接的な因果関係にある場合のみが許されていることを指摘する。これは単文の構文において表現できる因果関係が直接的なものに限られているとする制約 (Goldberg 1995, Matsumoto 1996, Wunderlich 1997, Wolff 2003 など) に還元できると思われる。